

〈染分地遠山に鶴竹梅模様子ども着〉から考える

永津 穎三

「琉球美、造形研究会」では、2024年5月13日に「紅型衣裳見学会」を開催し、沖縄県立博物館・美術館に於いて同館所蔵の〈桃色地小紋文様紅型木綿衣裳〉を熟観した。この「見学会」では、本研究会会員に加え、「浦添型」や「琉球王国文化遺産集積・再興事業」の復元に携わったなど、多様な専門性を持った方々が一堂に会して閲覧できたことで、多様な視点から「臘型細模様紅型」の「美」の構造を検討することが出来た。

その中で、私自身、2022年6月に東京国立博物館の『沖縄復帰50年記念 特別展 琉球』でこの〈桃色地小紋文様紅型木綿衣裳〉を観た時の疑問、なぜこのような揺らぎのある心地よい振動感をこの衣裳から感じるのか、その造形的な構造をある程度読み解くことが出来た。

今度は、2012年「沖縄復帰40周年記念 紅型 琉球王朝のいろとかたち」展で最も印象に残った〈染分地遠山に鶴竹梅模様子ども着〉を、同様の「見学会」として開催し、熟観し考察してみたい。

この〈染分地遠山に鶴竹梅模様子ども着〉は、大人用の着尺の幅を切り詰め、丈も繋いでとても大胆で美しい構成となっている。2012年12月から2013年1月にかけて開催した葵俱楽部（名古屋市）での個展のため、紅型をモチーフとしたTurbulence series Katagamiを制作した私は、続いてこのような展開、つまり、通常の着尺の状態（大人用）と、その着尺の幅や丈を切り詰めて再構成した状態（子ども用）を対比させた絵画作品を制作できなかと考えていた。

その前段階として、それまでのTurbulence Seriesからは離れてしまうが、より色面的な展開を行うことが必要と考え、型紙も現存する紅型として〈染分地遠山に椿柴垣梅桜菖蒲模様衣裳〉を選び、習作を試みた。



〈染分地遠山に椿柴垣梅桜菖蒲模様衣裳〉
（『紅型 琉球王朝のいろとかたち』展図録 図版153）

しかし、この習作は未完のまま挫折している。何種類かTurbulenceシリーズと同様の画面形態（胴衣に近い形）に合わせてこの型紙の組み合わせを考えているが、途中で断念している。

今となっては、何故継続しなかったのか自分で不明だが、おそらく、このような色面的な紅型を基にしてでは、元の紅型の造形性を乗り越える絵画作品を創り出せそうにないと思ったのではないだろうか。

〈桃色地小紋文様紅型木綿衣裳〉の見学会を通して、その造形的な構造をある程度読み解くことが出来たことで、短絡的に作品制作に結びつける必要は無いのではないかと考えるように、私の思考が変化した。

広く、「染分地」型の紅型を比較し考察すること、それ自体が奥行きのある興味深いテーマであり、このような考察を進める中から、もしかしたら、新しい作品を生み出せる発想や契機も出てくるかもしれない。

「琉球美、造形研究会」の活動を通して自然に、そのような考え方へ変化してきたのだと思う。

〈染分地遠山に鶴竹梅模様子ども着〉を見学会で熟覧してみたいと思い、改めて、この図版が掲載されている『沖縄復帰40周年記念 紅型 琉球王朝のいろとかたち』展図録を見た。

図版162に〈染分地遠山に鶴竹梅模様子ども着〉が掲載され、図版153に〈染分地遠山に椿柴垣梅桜菖蒲模様衣裳〉、図版154にその型紙が掲載されているのは、2013年に色面的習作を試みていた時から認識していたのだが、図版155に〈染分地遠山に松竹梅模様衣裳〉が掲載されていたことに、この時、初めて気付いた。

〈染分地遠山に松竹梅模様衣裳〉は〈染分地遠山に鶴竹梅模様子ども着〉の着尺の幅を切り詰めていない元々の着尺が用いられた衣裳だった。図録の小さな図版写真のためだったのか、〈染分地遠山に松竹梅模様衣裳〉は着尺を左右対称に用いられていたためなのか、全く印象が異なり、迂闊にも見落としていたのだった。

これも後から気付いたことだが、「衣裳」の方は名称表記が「鶴竹梅模様」でなく「松竹梅模様」だったことも、気付かなかった要因かもしれない。(同じ型紙を使っているのだから、名称は統一すべきではないかと思う)



〈染分地遠山に鶴竹梅模様子ども着〉
(『紅型 琉球王朝のいろとかたち』展図録 図版162)



〈染分地遠山に松竹梅模様衣裳〉
(『紅型 琉球王朝のいろとかたち』展図録 図版155)

さらに比較してみると、印象の違いは、山の部分の色挿しが異なっているためだと分かった。山の形態がはっきりと現れているのは、〈染分地遠山に松竹梅模様衣裳〉では中央、〈染分地遠山に鶴竹梅模様子ども着〉では右袖にかかる部分である。どちらにも左右の脇に山半分の形態も確認できる。

〈染分地遠山に鶴竹梅模様子ども着〉では山の左右どちらもが黒色で色挿しされているのに対し、〈染分地遠山に松竹梅模様衣裳〉では中央の山は左右が同一の図柄で成立し、ここには黒と赤の縁取りのある桃色の山として、脇の部分は地色の赤のままになっていて輪郭でしか山を認識できない。



〈染分地遠山に鶴竹梅模様子ども着〉



〈染分地遠山に松竹梅模様衣裳〉中央



〈子ども着〉



〈衣裳〉右脇

〈染分地遠山に松竹梅模様衣裳〉と〈染分地遠山に鶴竹梅模様子ども着〉には、同一の型紙を用いながら、それぞれ異なった色挿しが施された着尺が使われている。子ども着が仕立て直しであったとすれば、表裏両面染になっていた可能性もある。とすれば、〈染分地遠山に鶴竹梅模様子ども着〉の着尺で仕立てられた大人用（着尺の幅を切り詰めずそのまま使用した）衣裳はどのようなものだったのか、推測してみたくなつた。

〈染分地遠山に松竹梅模様衣裳〉では、着尺の左端の山と右端の山とでは色挿しが異なっている。これは、図柄を左右対称に仕立てた時の効果を考え、背の中心で合わさる山だけに色を挿したためではないかと推測できる。ということは、これは左右対称の図柄として仕立てることを前提に染められたと考えるのが自然である。

それに対して、〈染分地遠山に鶴竹梅模様子ども着〉の方は、両端の左右の山が合わさって一つの山を作っている。勿論、左右対称の図柄として仕立てることも可能だが、もともとは同じ向きに並べる仕立て方を意識した図柄だったのではないだろうか。このように推測し、AとB、二つの仕立てパターンを考えてみた。



pattern A は、〈染分地遠山に松竹梅模様衣裳〉と全く同じ仕立て方である。山の部分だけが色挿しの異なるものに置き換わっている。

それに対して、pattern B は、着尺を左右対称ではなく、同じ向きに並べ、山の左側と右側が合う位置でバランスの良い配置とした。

ただし、右袖だけは反転する図柄にしている。これは、〈染分地遠山に椿柴垣梅桜菖蒲模様衣裳〉の仕立て方を参考にしたものだ。

山の左側と右側が合う位置にすると斜めに動きのある構成に見えるようになるのだが、全てを同じように並べることをしないのが紅型の美意識であるように感じる。どこか一箇所に破調の部分を配置している例が多い。

この二つのパターンを示すためには、他の数種類のパターンも作ってみた。私のパソコンにはそれらのデータもあるので、ご希望があれば、それらも公開できる。

この pattern B がそのまま反転したパターンもある。破調の部分が左袖に来るのだが、どちらが最善かは、最後まで迷った。

現在の私の感覚で pattern B の方を選んだだけである。

図録の小さな図版を比較するだけでも、これだけの推測が楽しめた。実際の衣裳を比較熟覧することが出来れば、どれほどの疑問が湧き、どのような推測が生まれるのだろう。

幸い、〈染分地遠山に鶴竹梅模様子ども着〉、〈染分地遠山に松竹梅模様衣裳〉、〈染分地遠山に椿柴垣梅桜菖蒲模様衣裳〉とその型紙の全てが沖縄県立博物館・美術館の所蔵である。

これら4つの閲覧資料を比較検討する「見学会」が開催できることを心待ちにしている。

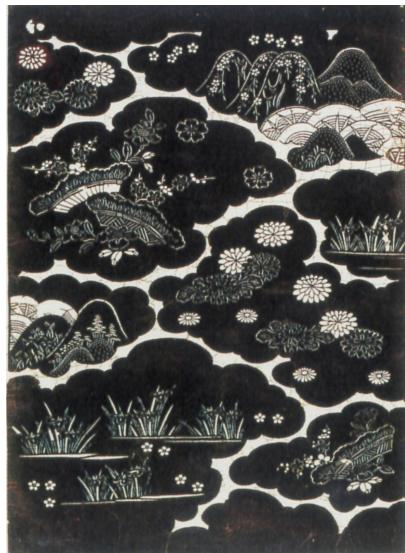


本小論の末尾に、「幸い、〈染分地遠山に鶴竹梅模様子ども着〉、〈染分地遠山に松竹梅模様衣裳〉、〈染分地遠山に椿柴垣梅桜菖蒲模様衣裳〉とその型紙の全てが沖縄県立博物館・美術館の所蔵である。これら4つの閲覧資料を比較検討する「見学会」が開催できることを心待ちにしている。」と記しました。

この4点の資料を閲覧する見学会を2025年6月17日に開催させていただくことになっていましたが、閲覧申請書を提出後、暫くの後、担当の伊禮拓郎学芸員からご連絡をいただき、〈遠山に椿柴垣梅桜菖蒲模様染地型紙〉は、沖縄県立芸術大学附属図書・芸術資料館蔵であるとご指摘いただきました。

私が『沖縄復帰40周年記念 紅型 琉球王朝のいろとかたち』図録の記載を見間違えていたことが判明しました。

訂正し、お詫びいたします。見学会の準備につきましても、伊禮学芸員にご不要な労力をおかけいたしましたこと、深くお詫び申し上げます。



〈染分地遠山に鶴竹梅模様子ども着〉から考える

著者：永津禎三

私家版

2025年1月11日発行

2025年5月9日改訂

2025年6月2日改訂2版